

世代超えて熱中「武道本来の姿」とか…

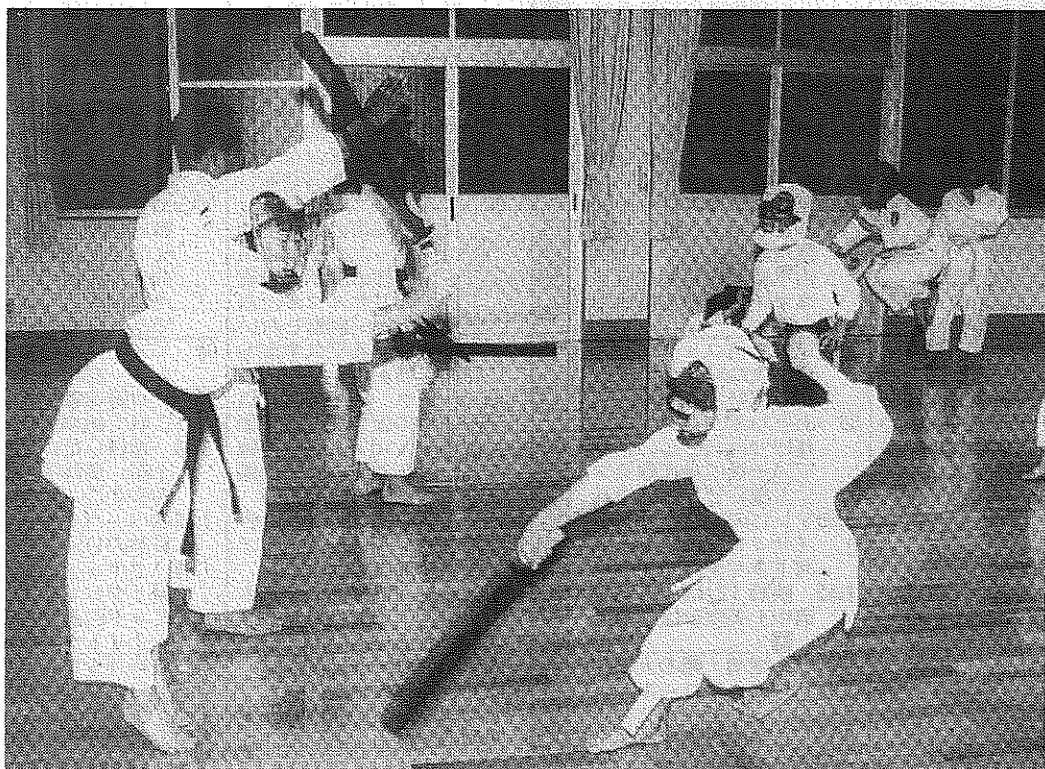
ストレスを解消

競技人口10万人 20日に国際大会

プラスチック製の刀、槍、なぎなたなど得意の「武具」で切り結ぶ。相手が倒れても、構わずに切りかかる。かつて男の子を夢中にさせたチャンバラは、今や全国に道場を構える立派な格闘技である。「スポーツチャンバラ」。競技人口は十万人を数え、二十日には横浜市で国際大会も開かれる。「ストレス解消にものこいでいます」。スピード感を評価して、課外活動のクラブに取り入れる中学校も現れ、世代を超えて人気は急上昇だ。

プラスチック製武具、他流試合も

チャンバラいまや格闘技



スポーツチャンバラで使用する刀は長さ約一尺で、プラスチック製の棒を発泡スチロールで包み、その上を柔らかい布などで巻いた（二・一尺以下）と種類も特注品。このほか小刀（約多様。二刀流も認められて

いる。たたかれて（切られて）もけがをすることはないが、アイスホッケーのマスクに似たプラスチック製の面を使用。服装は、空手着が一般的だ。面、胴、小手と攻撃場所が指定されている剣道と違って、スポーツチャンバラはすべてが対象。倒れた相手への攻撃もできる。攻撃を受けた選手に、有効打の確認を求めて判定する三本勝負が原則。小刀Vsなぎなた、刀Vs槍など「他流試合」とも言えるフリー部門もあり、三人一組で行う団体戦の大將戦は、得意の武具で戦える。

考案者は横浜市の警備会社役員で、国際スポーツチャンバラ協会会長を務める田辺哲人さん（五〇）。「武道の本来の姿は何か」と研究を重ねた結果、本能に忠実に戦えるチャンバラに行き着いた、という。現在、道場は近畿圏や首都圏を中心に約三百五十。滋賀県甲南町などは、同協会員を講師として招いてスポーツチャンバラ教室の開設を検討。公民館講座で教室の開催を考える自治体も多い。

同県甲西町の道場、勇心会では、子供から大人まで約七十人が会員。師範の町田勇さん（五〇）は「空手から拳法まですべての格闘技が活用でき、大人はストレス解消にもついで、と入部希望者が増えています」と言う。剣道の有段者が、子供に負けるケースもある。「剣道が振り下ろす寸止めに対し、スポーツチャンバラは切るような回し打ちが原則。足を狙われることもある。スピードにも感ぜられるのでしよう」そのスピード感がうけて東京・葛飾区などの中学校ではクラブも発足。国際大会は、海外からの参加者だけで約三十人。エントリーは六百人を超える。田辺会長は「武道本来の姿を取り戻している。二十一世紀のグローバルスポーツを目指し、誰でも気軽に親しめる武道として、今後を育てていきたい」と話している。

↑プラスチックの「武具」で切りあうスポーツチャンバラ。スピードと「臨場感」が人気を集める。滋賀県甲西町で